
ピカパチ日記

會田 雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピカパチ日記

【Nコード】

N1043Z

【作者名】

會田 雅

【あらすじ】

この世界には私達の知られざる出来事や人物が結構いたりする。たとえば、ポケモン。

あいつら実はゲームだけのキャラじゃなくて実際に居る連中を新しく見つける度にゲームを通して紹介してるだけ…とか？

今観測されているのは501匹。

ゲームと違って此処にいるのはポケモンの能力を持った人間。

世界に478人居る能力者は人間に混じって普通に生活をしていた。

・・・というか會田が変身ヒーローもの好きすぎて作った願望の副産物。

ポケモン化して戦う少し身近なヒーローです。

一日目（前書き）

出だしが完璧に一昔前のジャンプのラブコメみてえだ…

一日目

寝ぼけ眼で重い自転車をこぐのが俺の平日の日課。

正直体力的に死にそうだと思ったことは多々あるが、今はもう慣れた。

結構体力が付いたのかもしれない。

えー、かいつまんで説明しますと
俺、登校中。

自転車が俺の体重以上の負荷を俺の足に強制する理由は一つ。

「ピカ、遅い」

後ろに俺のマドンナを乗せてるからさ！

胸のちょうどしたあたりの髪を肩口らへんでツインテールにしてる
の小柄な眼鏡つ子！

名前は木崎胡桃きさきのくるみ

ちよいと毒舌だけど、その辺はご愛敬…

というよりもその態度が俺に対してだけというのがかなりくるんだぜ！

なんつーかさ、俺だけのクルミって感じがもう最高なんだよ

「ニヤけないでよ、気持ち悪い」

「わ、悪かったな…」

ついほころんでしまっていたようだ。

俺の片思いは周知の事実だが、あえて誰も触れていないらしい。

微妙に腹立つぜ？その気遣い

失恋決定みたいにするなよ！

希望はまだあるっつーの！

校門が見えたら近くの駐輪場に自転車を止め、木崎と一緒にくぐる。

隣を歩く木崎が何とも言えないくらい可愛い。

頭一つ分の身長差が最高だ。

「よっ、鋼太」

「おう、涛二か」

校舎へ歩く途中、唐突に声を掛けてきたのは山内涛二やまうち トウジ

俺のクラスメイトで、ロングセラーを誇るゲーム、【ポケットモン

スター」ヲタク。

他の連中にはポケフリークなんて呼ばれてる。

木崎にかまけすぎて忘れていたが、俺は雷鋼太。いかずちウタ

マサコがくえん
この真砂学園で一番喧嘩が弱い男!!!（自称）

つまり無害なので友達になってくれる女の子募集中だッ！

「なあなあ、お前知ってるか？今月中旬あたりにポケモンの新しいシリーズ出るんだとよ。たしか…」

「ポケットモンスター ルビー・サファイアだろ？」

「そうそう！新しいポケモンとか出まくるらしいぜ！マジで楽しみ」

「・・・だってよ、木ざk」

あれ？いない…

「この年でポケモソフリークとかw」

「ないわーw」

「雷君とか、顔だけ見ればイケメンなのにねー」

「えー、箏羽ちゃんあーゆーのが好みなの？ちよい引く」

「クルミちゃんは近すぎて知らないだけだって！」

一日目（後書き）

雷君とクルミちゃんのビジュアルは授業中に書いた落書きだったりする。

一日目、学校の後（前書き）

なんか…

とりあえず任天堂の方々すみません！

この作品はフィクションでえええええす！

俺、ポケモンなんて神ゲーつくりだせちゃうゲームフリークの方々とかめっさ尊敬してますから〜！

一日目、学校の後

「おいおいおい！何地味に傷つくようなことを聞こえるように会話してんだお前ら！」

「ごめん、つい本音が」

「胡桃ちゃん、けっこうきついと思うよそれ」

「鋼太にはこれで十分」

木崎の毒舌にいたって常識的な言葉を返しているこの子は水戸部琴羽。みとべ

少し長めの髪の毛をいつもピンク色の髪飾りでハーフアップにしている、木崎から見ても結構可愛いらしい。

もともと木崎は「可愛い子ほど苛めなくなっちゃうんだよ。あの子、からかい甲斐があるんだ」

なんてSッ気満々な発言をしてたから結構要注意だ。

「鋼太はなんでこれでも胡桃ちゃんなんだよ？もしかして…Mッ気あつたりするのか？」

「ダアホ！お前は木崎の魅力がわかってねーだけだっつの」

そのまま俺たちは他愛のない話をしながらいつもどおり教室まで歩いた。

その後普通に授業を受けて普通に高校生活を送る。

俺も木崎も至って普通の高校生だ。

――学校ではな。

下校中、俺のカバンに入っている携帯端末が振動する。

「司令……か」

周りで木崎以外誰も見ていないことを確認してからそれを取り出す。ボタンを押すと振動は止み、地図が表示される。

場所を確認すると、俺たちはそこへ走った。

実はこの世界、ポケモンが実在するんだなんて言ったらお前ら信じるか？

信じる信じないはいいとして、まあいるんだわ。ただし、あの可愛い生き物じゃなくてその能力を持つちまった奴がな。

【世界政府】の末端、表立っては任天堂という名の会社が持つ一部組織、ゲームフリークはそいつらの存在を観測・研究し、可愛らしい生き物としてキャラクター化してゲームを売っている。

それがポケットモンスター。

新シリーズが紹介され、出される新しいポケモンとはすなわち新しく発見された能力者のデフォルメ系なのだ。

その能力を危険視した【世界政府】は発見された能力者たちに役割を与えた。

彼らの情報を公開しない代わりに各々が生んでいる地域の治安を守る裏方として活躍しろとのこと。

つまり、秘密警察だ。

――俺はピカチュウ、その秘密警察の一員だ。

一日目、終

俺の携帯端末、コミューズが表示した場所につく。

塀を見を隠しながら見ると、街灯の逆光になっていてシルエットしか確認できないが大柄な男がそこにいた。

「次はアンタだ！俺のストレス解消、まともに付き合ってくれかい？」

「ひいつ…！」

男の足元に横たわる血塗れの男と、怯えきつたもう一人の男はどうみてもカタギの人間ではないが、両者ともこの場合は被害者のようだ。

「おいおい、あんたら金が欲しかったんだろ？安心しな、付き合ってくれたらやれるぶんだけやるよ」

大男が拳を振り上げる。

「ただし、使えるかどうかは別問題だな」

「うああああああああっ！」

・バチツ・

コンマ数秒、拳が振り下ろされないことに気づき、男が目を開ける。

「あんた、人間相手にその力を奮って…自分自身が情けなくならな

いの？」

電線に丸まった尾の先を引つ掛け、右手を大男にかざす少女が彼の目に入る。

人間のものとは思えない青い耳と大きな尾。

暗闇の中彼女の白い髪の色が鮮やかに映える。

戦闘モードに入った木崎胡桃、名称不明のポケモン能力者が鋭い眼差しで返り血まみれの男を射抜いていた。

戦闘モード、俺たちはポケモン化と呼んでいるこの状態は、自らが持つポケモンの能力を開放した状態だ。

基礎的な力が上がるのはもちろん、自分のタイプに見合ったポケントモンスターゲームの技が放てるようになる。

だがそのかわり、人型ポケモン以外は容姿が人間離れしてしまう。

木崎は髪が白くなり、耳と尻尾が生える。

「邪魔すんじゃない！」

- ガツ -

木崎にふるわれる野郎の手首を掴み上げるよく締まった腕。

「汚い手で木崎に触ってんじゃない、下衆が」

黒いラインの入った黄色くて細長い耳。

「脳天までシヨックを加えねえとわかんねえってか？この筋肉ダルマが」

- バチバチ -

不規則に火花を放つ電流。

「喰らいやがれ！10まんボルトオオオオ！」

ポケモン化した俺って、かけーんだぜ？

仰向けに倒れた男の顔を確認する。

「ピカ、こいつ…覚えてるよね」

「ああ。業田信男（いっただ ノブオ）、障害過失致死を脱獄するたび繰り返す連続脱獄犯。ゴリキーの能力者だっけな」

「懲りないやつだと思おうのと同時に、刑務所の警備体制に疑問をもつよ。全く」

そう言っただけで電線から降りた木崎が信男の頭に蹴りを入れる。

「う…うわああああ！あんたら、いったい…何なんだ！コッソコスプレで…スタンガンでも持ってたのか？」

「助けてもらっておいでそのセリフはご挨拶ね」

「ひいっ…」

「ま、いや。とつとその瀕死の人持ってどっかいっちゃえば？

無差別殺人の趣味ないし」

「勝手にしろってのは同感だぜ？だが一つ条件がある」

「んなつ、何でしょうかつ！」

俺らのためにも釘をさしておくか。

「俺達の事を口外しやがったら殺す」

「ひいいいいいい！！！」

男は血まみれの仲間を抱えて逃げていった。

先ほどまで腰を抜かしていたというのに、なんつー体力だよ。

「おうおう、ピカ怖ーい。学校とは真逆だもんねえ」

いち早くポケモン化を解いた木崎があくびをしながら言う。

髪の毛はいつもの黒に、尻尾は消え、耳は人間のそれと同じ位置と形に戻っていた。

「普段から怖ーいお姫様が何をいってやがんだよ……」

それに乗じて俺も解く。

俺たちはそのまま他愛のない話をしながら帰路についた。

高校に行くために越してきた俺と親なしの木崎が二人で生活している粗野なボロアパートへ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1043z/>

ピカパチ日記

2012年1月14日19時50分発行